


 書評

加藤敏 著

精神病理・精神療法の展開

二重らせんから三重らせんへ

新宮一成

このたびの加藤敏氏の新著を、私は「精神科医が精神科医であるための教科書」と呼びたい。それほど、精神科医らしさというべきものを隅々まで照らし出している書物だからである。精神科医は、自ら精神科を標榜したことだけで自分が精神科医であるという確信を持てるわけではない。自己確信の裏返しの言説にもしばしばぶつかる。「精神科は脳内科でええんや」と、私が研修医の頃に、ある先輩医師が得意げに言い放っていた。自分の虚無主義に酔っていたのであろう。そのような虚しい自己満足の影を、この本は一切引き摺っていない。精神科医の自己確信はそのすべてが力強く肯定されている。

どこからそれは来るのだろうか。実は、この世の中で精神科医が生き延びるための生業に焦点を当てていないという逆説によってこそ、この本において、精神科医の自覚のありようが示されているのである。そのありようが隠されているとすれば、それはその周辺で輝いているコロナによってこそ、それがより鮮明にその存在を発揮するためである。

精神科医らしさは、正確に診断し適切に処方してその社会的対価を得ることによって支えられているのでは実はない。お金にならない、今までは辺縁的な、ことのついで的活動であると思われていたところにこそ、それは現れる。本の副題を見てほしい。「二重らせんから三重らせんへ」とある。三つ目のらせんは「環境」、文字通り「取り巻くもの」のことである。しかも外側にありながら知らず知らずのうちに内側に食い込んで本質の一部を成しているという仕方を取り巻くものである。

「プラセボ効果」から始まり、その三つ目のらせんの主題は多岐に及ぶ。論文集である以上、その

折々の問題意識に応じて各章が執筆されたであろう。しかしそれにも拘わらず、本書は、そういった場当たり性を全く感じさせない。むしろ真の精神科医らしさを告げるあのコロナを輝き出させるべく、綿密な計画の許に書き進められたものであるかのようなのである。事実、著者にだけは、そのコロナが初めから見えていたに違いない。

それゆえ、一つひとつの「環境」をめぐるテーマたちは、そのコロナの中に組み込まれることによって、精神科医をそのアイデンティティの中核に導いてくれる道として、新しい風景を見せている。「作業療法」にせよ「病名告知」にせよ「緩和医療」にせよ、実によくそれぞれの歴史が踏査され、それらの医学的正統性が改めて認識される書きぶりになっている。精神科医は、自らのためにその道を辿りながら、近年のこれらの分野の進歩を知ることにもなるだろう。

しかしそれならばやはり、問題の隠された核心部、つまり精神病への理解が用意されているのでなければならぬと人は思うかもしれない。そのような人にこそ、本書の「了解不能なもの」や「内因」についての考察を熟読してもらいたい。コロナの中央部を成している皆既日食の暗闇に突然「実存開明」(ヤスパース)の明るみが開け、了解不能な内因の変動への精神医学的な覚知に、人間の置かれた条件への畏敬が宿り、そこから精神科医の精神科医としての自覚が新たに芽生えてくることであろう。

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

●A5 336 頁 2015 定価：本体 3,200 円＋税
中山書店刊